

書 評

マリーズ・ウォランスキー著

『女たちについて相変わらず全然分かって
いない男たちへの公開書簡』

内 田 樹

「あなたは女について何も分かっていない」と責められ続けて40年になる。この言葉はいつも決定的な場面で、怒りと悲しみを込めて、ふり絞るように吐き出された。弁明の余地のないこの断定を前にして、私はいつも黙り込むしかなかった。

OK、私は「女について何も分かっていない。」それは認めよう。しかし無能の認知は必ずしも学習の動機づけにはならない。「バカだよ、この子は」と言い続けられた子供が勉強好きになることがまれなのと同様に。

私は依然として「女について何も分かっていない男」である。そのことをあらかじめ告知しておこう。期待のないところに失望はない。

おそらく私はフェミニストからは「比較的無害な男権主義者」というあたりにランクづけられていると思う。（「比較的無害な犯罪者」というのと同じく、形容矛盾を含む称号だ。）私の基本的なスタンスは、フェミニズムには賛成だが、私のことは放っておいてほしいというものである。

「女について相変わらず全く分かっていない男」宛の公開書簡を、私はそのような「分離主義的」停滞のうちにある自分自身に宛てられた書簡として読んだ。

著者ウォランスキーについては、彼女がフランスのフェミニストであり、ジャーナリストであることしか私は知らない。この本を取り寄せたのは、題名

にひかれたからである。

題名から察するに、この書簡の趣旨は啓蒙的なものではないはずである。「相変わらず全く」という疲れのにじんだ副詞の選択にそれはすでにうかがえる。男たちに宛てた公開書簡である以上、それは単なる男権主義の告発でもないはずだ。(告発されるほどの罪を犯しているものは、ふつう告発状を読まない。)

これは性間の絶望的な隔絶を静かに認めた「休戦提案」のようなものではないかと私は考えた。それなら私にも対話のチャンスはありそうだ。

予想にたがわず、ウォランスキーの本は、現代における性間の断絶についての、クールで苦い現況報告だった。著者の立場は次の言葉に集約される。

「女性は男性よりも劣っているのでも、優れているのでもない。女性は男性とは別のものであり、男性は女性とは別のものである。(……) 差異を認めること、それがおそらく今日における問題の核心である。」(p. 18) (強調はウォランスキー)

これはフェミニストの口から出る言葉としては、かなり例外的な発言であるだろう。管見の及ぶ限り、ジェンダー論の多くは、男女の性差は生物学的セクシュアリティよりも文化的ジェンダーによって強く決定されており、男女は本質的に「両性的」とであると主張しているからである。(だからこそ、あらゆる領域における「境界線の解消」が肯定的に語られうるのである。) 男が自分の中の女性性を受け入れ、女性が自分の中の男性性を活用する社会、「男性がコンプレックスなしに『母親役をする』ことができたり、女性が自分のなかにある男性的欲動を積極的に使ったりできるようになる」社会をバダンテールのようなジェンダー論者は語ってきたわけだが、ウォランスキーの立場はあきらかにそれとは異なっている。

ウォランスキーによれば、性間差異は解消するどころか、いままでになく先鋭化している。両性間のヘゲモニー闘争はかつてなく激化している。いまは薔薇色の夢を語るときではなく、灰色の現実をみつめるときなのだ。

話はいきなり殺人事件から始まる。夫に離婚の意志を伝えたために、こめか

みに22口径を撃ち込まれて、4人の子供と一緒に焼き殺された女性の話。同じ状況で13箇所をナイフで刺され、さらにS&W38口径で頭を吹き飛ばされた女性の話。

男からの独立を求める女に対するこの物理的暴力をウォランスキーは男たちの女たちに対する「反撃」の一つの現れととらえている。

70年代以降のフェミニズムの破竹の進撃は、理論的・実効的にさまざまな領域で男性支配を覆した。しかし男たちはほとんど悔い改めなかった。男たちは屈辱的な敗北感を味わい、「報復」の決意を固めただけだった。男たちは新しい性関係を構想するどころか、今やさまざまな「偽装」のもとに失われた覇権の回復を企てている。これがウォランスキーの現状認識である。

たしかにジェンダーをめぐる状況はめまぐるしく変化した。「すべてが覆った。役割も、規範も、風俗も、価値観も、習慣も、ものの見方も、生き方も、すべて変わった。」(p. 17)

妻が外で働き、夫が家事をするカップルがいる。仕事そっちのけで育児に熱中する父親たちがいる。(コリーヌ・セローの映画『三人の男たちと赤ちゃん』への男たちの熱狂。)美貌を磨き上げる男たちがいる。男性ダイエットの流行。男性用エステティック・サロン。《エゴイスト》と《アラミス》。(フランスの男性用香水の売上げ高は90年代はじめに10年前の40倍に達した。)次々と刊行されるモードと美容と旅行の男性誌。激増するホモセクシュアル。「女になりたい。女のように生きたい」と公言する男たち。

しかし、ほんとうに何かが変わったのだろうか?ウォランスキーはこの現象を擬制的な性差の消滅というふうに楽観的にはとらえない。

これは単なる「無意識的な模倣」(mimétisme)にすぎない。男たちは女たちを真似ているだけなのだ。そこにはいかなる創意も工夫も発明もない。それどころか、それは女性への共感や接近でさえない。

男たちは、女たちの攻撃から身を避けるために、女たちからの告発をまぬかれるために、女たちとの対話を回避するために、女の真似をしているにすぎない。

男たちが女のふるまいを模倣するのは、和解のジェスチャーでも、共感のしるしでもなく、男たちのゲリラ的な反攻であるというのがウォランスキーの見解である。

「社会的、経済的な活動における特権という伝統的な領域において支配権を脅かされた男たちは、女たちの猿真似をするのが最上の策だと気づいたのである。(……) 無意識的模倣を通じて女たちに近づきながら、男たちは結局たった一つの目的しか持っていない。それは女から遠ざかることである。」(p. 115)

女への憎しみゆえ、女のふるまいを戯画的に模倣してみせる、という屈折した反撃の典型的な例は「男性解放運動」(mouvement masculiniste)に見られる。(私はこのような運動の存在することを知らなかった。日本ではほとんど報道されることのない現象なので、少し紹介しておきたい。)

男性解放運動は、離婚に際して裁判所が親権を当然のように母親に賦与することに反対して、親権の平等を求めるところから始まった。運動の一指導者はこう語っている。

「われわれは保健、公教育、医療など女性がほぼ独占している業種における性差別の撤廃を要求している。われわれは男性の要塞が打ち壊された以上、女性の要塞も打ち壊されることを求めているのだ。」(p. 119)

ここには「女性解放、労働の権利、経済的自立、避妊手段などによって父親の排除が加速された」(p. 120)という男たちの側の危機感が認められる。

「われわれは息子や孫たちに警告しなければならない。さもないと、彼らは女主人たちに顎で使われる配達係かカフェのギャルソンか床磨きになる他ないだろう。彼女たちがわれわれから責任あるポストを盗んでしまうからだ」と男性解放同盟の会長は語っている。

82年に創設されたこの団体の目標は「脅かされている男らしさの大義を防衛する」ことにある。この種の運動体は70年代アメリカに発生し、いまや900を数えるという。過激派《マスキュリニスト》は92年にブラジルで世界大会を開き、「万国のマッチョたち」を糾合した。

フェミニズムのグロテスクな戯画である《マスキュリニズム》は、女性解放の進行に対する男たちの対応が本質的に「模倣的」であり、その基本的な情念が「報復」であることをあらわに示している。

ウォランスキーによれば、男が女を嫌悪し、憎悪するのは個人的なあるいは偶発的な徴候ではなく、全世界、全歴史を貫通する文化的伝統である。

「自分たちの権力が、はかなく脆いものであることを彼らは知っている。自分たちの《優越性》が幻想であることを彼らは知っている。だからこそ、男たちは、あらゆる文化において、女たちに対して父祖伝来の恐怖を抱くのだ。」(p. 132) 「この男性という種に内在する (inhérente à l'espèce masculine) 恐怖が女たちが被っている暴力と憎悪と迫害を引き起こす主要な要素であることは今やあきらかである。」(p. 137) 「女性に対する恐怖は父祖伝来のものであり、人類の歴史と同じだけ古い。」(p. 138)

この悲観的な決定論的立場から、ウォランスキーは現代の「女性嫌悪」の症例を分類列举する。すべての男はこのカテゴリーのどれかに類別されるはずである。

(1) ホモセクシュアル。「ホモセクシュアルの共同体は、男たちが逃げ込む新たな逃避所である。」(p. 143) たしかに伝統的なマスキュリニテを審問するという点については、ホモセクシュアルは女たちと共同戦線を張っているように見える。(じじつ、バダンテール流の「両性性」論に立てば、ホモセクシュアルは「男性性からの解放」として称揚されるべきものである。) しかし、その本質は男だけの閉じられたサークルの形成であり、(ハード・ゲイが端的に示すように) 女性嫌悪であるとウォランスキーは考える。

(2) ピーター・パン。少年のままでいようとする男たち。彼らは社会生活を忌避し、いくつになっても親離れせず、新しい家族単位を作ること为先延ばしにし、「いつまでも学生のもままでいたがり、大学にぐずぐずいて博士課程に進んだりする。」(p. 145) 大学教員の相当数はこの嫌疑を逃れられない。

(3) 遁世派。これは「知的女性の矛先からの後退戦を戦っている」男たち

である。彼らは「女に見下されること、女より頭が悪いこと、女に知識で及ばないこと、女に威信で劣ること」に耐えられない。彼らは支配―被支配の枠組みでしか性関係をとらえられないので、負けると分かっている関係には入り込まない。「彼らは独身生活に腰をすえ」、「両性間の融和や協調ということが想像できないので、『恋愛』と呼ばれる不治の病におびえて身を固くしている。」(p. 147) 他人ごとではない。

(4) 買春派。女性に「身の回りの世話」と「献身」と「寛容」を期待する男たち。性の解放、避妊手段の普及、エイズの恐怖といったマイナス要因にもかかわらず、フランスではプロスティチューションは年々増えている。ある買春派の弁明。「妻とはすべてを分かち合わなくてはならないが、金で買った女とは何も分かち合わなくていいからだ。」(p. 152)「分かち合う (partager)、これが物語の最後の言葉なのだ。女と何かを分かち合うこと、まさにそれこそ男たちがしたくないことであり、これまでも一度も望んだことのないことなのだ。」(p. 152)

「両性の不一致は現実的であり、全面的であり、不可避的である。私たちの夢想は決して出会うことがないだろう。これは悲観的にすぎる見方だろうか？いや、違う。これは単に現実的な見方なのだ」(p. 154) とウォランスキーは言明する。

むろん希望の余地が全くないわけではない。しかしウォランスキーは女の側からの歩み寄りを自制している。「私たちを根源的に隔てているこの溝はあなたたち男が掘ったものだ。ならば、それを埋めるのはあなたたちの仕事ではないだろうか？」(p. 158)「女たちは二つの種族の間に架橋しようと男たちにつねに手を差し伸べてきた。」(p. 161) だから、これから先は、溝を埋め、橋を架けるのは男たちの仕事である。むろんそれが虚しい期待であることは分かっている。なにしろ「あなたたちは女のことをいつだって何にも分かっていたのだから。」

「私たちがこれまでのように愛し合うことはもう決してないだろう。しかし

これから先私たちは、いったいどんなふうに愛し合ったらいいのだろう？」
(p. 163)

これがウォランスキーの最後の言葉である。

私はウォランスキーの現状認識に半分賛成で、半分反対である。その理由を述べる。

ウォランスキーが「女性嫌悪」の徴候として挙げた特徴のいくつかは、あきらかに私自身のうちに認められる。「ぐずぐず大学に残る」「育児に熱中する」「家事能力を発揮する」「独身に固執する」、これらはことごとく私に当てはまる。OK、私は女性嫌悪である。しかし、私にそれ以外のどんな選択肢があったのか、私には分からない。(それ以外の選択肢を思いつかなかったという事実そのものが「女性嫌悪」の徴候なのだろうか?)

しかし、私はウォランスキーがこんなふうに女性嫌悪のレッテルを無制限に拡大してゆくことにはやはり反対である。

もしウォランスキーのように、すべての男が宿命的に女性嫌悪であるとしたら、女たちが生き延びるためには、「比較的無害な男」と「非常に有害な男」を識別することがさしあたり最も重要なものではあるまいか? 「男なんてみんな……」という議論の仕方はある種の女性読者にとっては痛快かも知れないけれど、結果的には「比較的無害な男」を虚無的にするだけで、「非常に有害な男」を抑制する効果を持たない。

ウォランスキーが本当に危機感を持っているなら、「とりあえず無害な男たち」と「いきなり有害な男たち」の間の差別化を計り、男たちを分断する戦略を採用するべきだろう。女の頭を銃で撃つ男と、結婚しようとしぬ男を「同じブイヨン」に入れるのは防衛上の愚策である。

もう一つ私が賛成できないのは、ウォランスキーの「教化的」態度である。

ウォランスキーは男が「男らしく」生きることを否定する。そして男が「女らしく」生きることも「模倣」として否定する。男は全く新しい生き方を発明しなければならない。そして、その「新しい生き方」にはガイド・ブックもモ

デルも存在しない。

これは厳しく、ストレスフルな要求だ。男たちは絶えず要求され、批判され、採点される。「あなたは無意識的な女性嫌悪からどの程度《解放》されたか？」

私はこういうものを「ストレス強化型学習方法」と呼んでいるが、これは効果的な教育プログラムではない。なぜなら、マイナス・カウントだけで構成されているような教化のプログラムにひとは長くは耐えられないからだ。

教育者としての経験から私が知っていることは、教育が効果的であるためには、相手を叱責するより先に、まず欠点をも含めた相手の資質を受け容れ、理解し、許容するところから始めなくてはならないということである。優れた資質を見つけ、それを活性化し、開花させるというかたちで「欠陥」を相対的に小さなものにしてゆくこと、迂遠だが実際に効果的な教育プログラムはそういうものであらうと私は思う。

ウォランスキーの結論はなんとなく「あまりに無能な学生」を前にして無力感に陥った教師のつぶやきに似ている。「あなたたちには、いいところが何一つない。だからこれからは、すべて減点法で採点します。減点の少ないものには、より多いものより罵倒の量を加減しましょう。」たぶんあまり効果はない。

私はヘゲモニーをめぐる性間の緊張が高まっているという現状認識をウォランスキーと共有する。私たちが食い違うのは「和平」へ向けての戦略的ステップの選択においてである。

ウォランスキーは、緊張を極限にまで高め、危機に気づいた男たちが自主的に根源的な自己変革を試みるのを待つ、(だめならそれっきり)というかなり冒険主義的な立場を取っている。私はまず「休戦」して、とりあえずネゴシエイトしよう、という無原則的平和主義の立場にある。どちらが有効なのかについては判断が下せない。しかし状況をより危機的にとらえているのはどちらだろうか？

(Maryse Wolinski, *Lettre ouverte aux hommes qui n'ont toujours rien compris aux femmes*, Albin Michel, 1993)